

# 大学生女子における バスケットボール競技のミスプレイについて —バスケットボールゲームにおけるミスプレイに着目して—

森田重貴・嶋谷誠司

## 要 旨

本研究では、大学生女子バスケットボール競技に着目し、ミスプレイの内実と現状分析により技術の改善と向上に役立たせるための基礎的データを得ることを目的とした。

ミスプレイについては、大学生女子バスケットボール競技のカテゴリーにおいても数多く出現した。特に技術的なミスプレイにおいては、パスに関するミスプレイが大半を占めた。

パスミスについては、多くの改善点があることが示唆された。

そこでパスミスに着目し、どのようなパスミスが発生しているかを調査したところ6種類に分類することができた。

パスは、その瞬間の状況を正確に把握する高度な判断力が問われる。ミスプレイやターンオーバーは勝敗との関連性が大きく、今後とも継続して調査をしていく必要がある。

**キーワード：**バスケットボール ミスプレイ 分析 状況判断 対策

## 1. 問題の所在と研究の目的

バスケットボール競技は、習慣（ハビット）のスポーツと言われ、主に練習で行われている行動が習慣化され試合時でも実行されるとされている。しかし、ミスの多いスポーツともされている。つまり、バスケットボール競技は、ミスが生じることもこの競技の特徴であり、ミスが発生することにより勝敗への影響があることを真摯にとらえて、「常に変化するゲーム状況に応じてその状況を解決」<sup>1)</sup>できるように、日ごろからトレーニングしていかなければならないと考えられる。

運動技術において運動学の分野では、「精形態は、いわば自然に発生した粗形態をただ繰り返しているうちにできてくるのではない。精形態に至るためには、その明確な運動表象がなければならない。すなわち、粗形態は人為的に改善されて、精形態に至るのである。」<sup>2)</sup> さらに「まず最初に運動は、いくつかの欠点を残しながらも、あるまとまりをもった大ざっぱな形態で習得される（運動の粗形態の発生）。その後、技術的な完成をめざして意図的な練習が繰り返されることによって、運動は修正され、洗練されて、次第に合目的かつ経済的となって、余分な動きや動きのぎこちなさなどがなくなり、運動の流動や弾性などの質的な高まりを示すようになる。次の段階において、運動は自分の意のままになるように自動化され、とりわけ意識しなくてもできるようになる。そしてさらに、あらゆる外的・内的な障害に対してもうまく対応できるようになるまで安定化させることがめざされる。このような段階にまで運動の習熟を高めることは、自らのもてる力を試合で最大限に発揮するためには大切である」<sup>3)</sup> ことが記されている。

一方、運動スキルはクローズドスキルとオープンスキルに分類することができる。クローズドスキルとは「環境が安定しているか、変化しても変化が予測できるために環境条件を考慮せずに運動を遂行できるスキル」<sup>2)</sup> であり、オープンスキルとは「環境条件が予測できない形で変化し、その変化に合わせてながら運動を遂行できることが要求されるスキル」<sup>2)</sup> とされている。つまり、クローズドスキルではパス・シュート・ドリブルなどの個

人戦術をディフェンスがない状況で問題なく行える技術を遂行できることであると考えられ、オープンスキルでは、ディフェンスがいる状況においてもパス・ドリブル・シュートの個人技術を環境条件が変化する中でその変化に合わせてながら個人技術を遂行できることであると考えられる。オープンスキルでは高度な状況判断が必要である。

特に個人技術の習熟度が未熟な中学生では、技術的なミスはもとより、状況判断を伴うオープンスキルにおいてはミスプレイが多く出現することは推測できる。

バスケットボール競技の運動経験の少ない中学生プレイヤーでは、個人技術が粗形態レベルのクローズドスキルを習得した程度で試合を行った場合では、ミスプレイが頻繁に起きることが予測される。そこには、オープンスキルという概念はなく状況の変化を読み取ることなくプレイは行われている。

ミスプレイに関する研究は多くの研究者が行っている。なかでも、石川は、地方の男子大学生を対象として、バスケットボールのゲーム分析を、オフェンスにおけるミスプレイの出現要因に着目し、ミスプレイが勝敗チーム間、得点差、試攻数との関連で、どのような出現率や攻撃失敗を行っているかなどのゲームの実態把握を試みている。そこでは、「パスミスとボールキープミス、また攻撃失敗率において、著しい差が見られた」、  
「敗者チームは、試攻数の高い割合においてはシュートミスをはじめ、ミスプレイ、特にパスミスとボールキープミスが多く、攻めではミスを繰り返す効率の悪いゲームを展開している」<sup>4)</sup>ことを導き出している。

山本らは、地方の女子高校生を対象として、バスケットボールのゲームにおけるターンオーバーについて、種類出現する頻度・時間帯について分析している。そこでは、「5分ごとにターンオーバーを3回するかしないかが1つの勝敗の分かれ目になっている」、「ターンオーバーは勝ちチーム、負けチームともに多かった」、「試合の時間帯の区分におけるミス出現の様子は、パスミス → ドリブルミス → キープミスの流れが確認できた」<sup>5)</sup>ことを導き出している。

吉井は、地方の男子大学生を対象として、ゲーム中におけるミスプレイ

の実態調査を行い、「技術上のミスプレイにおけるパスのミスプレイの割合が84.1%であること」. さらに、「攻撃開始の原因が、ディフェンスリバウンドやスローインからよりも、ミスプレイから開始された場合の攻撃成功率が最も高いこと」<sup>6)</sup>を確認している。

これらのいくつかの先行研究から、ミスプレイが起こることによって、ゲーム中に何らかの影響を及ぼしていることが理解できる。また、多くの研究者はパスによるミスが多発しているとの考察をしている。

しかしながら、研究の対象については年齢層など実に様々であり、また地方などの限定された場所や地域での習熟度が高い研究対象から導き出された結論は、ひとつの事例研究としての蓄積にはなると考えられるが、ミスプレイを減らすことが重要であると感じていながらも、その解決策はコーチやプレイヤー自身に任されてしまっているという現状が浮き彫りになり、結果的には、研究成果の混在を招いていることが窺える。

また、バスケットボール競技が創案された1891年当時は、13条のルールによって試合が行われることから歴史が始まった。<sup>7)</sup> それ以来125年以上もの年月が流れた今日、ルール改訂と技術や戦術が相互に規制しあいながら発展してきた。近年の大きなルール改訂としては、2001年に4ピリオド制及び24秒ルール、8秒ルールの導入、また女子においては2004年に使用するボールが7号から6号へと変更になったことから、特にオフENSEの各制限時間が短縮されることにより、バスケットボール競技の競技特性である「ゲームのスピードアップ」をより推進させることが考えられる。また、2016年度からは、オフENSEリバウンドを獲得してからシュートまでは、14秒とショットクロックが短縮され、フロントコートでディフェンスファウルがあり、リスタートする際のショットクロックも14秒と短縮されるなどのルール改正が行われた。

それに伴い、オフENSE試攻回数の増加、シュートにつながるオフENSEチャンスの増加などが考えられる。このように、現代におけるバスケットボール競技は、ルールの変遷に伴う技術や戦術の発展などを経て進行しているが、ゲームの勝敗因となりうる具体的なミスに関する研究は数が少ない。

そこで本研究では、現代のバスケットボール競技における、大学生女子のチームを対象にミスプレイとその内実の現状分析を行い、そしてさらには、そのミスプレイの現状を把握したうえでの今後の指導に役立てることのできる基礎的な知見やデータを得ることを目的とした。

## 2. 研究方法

本研究では、大学生女子バスケットボールの試合で起こるミスプレイとその内実の構造分析を行い、ミスプレイの構造を明らかにすることである。

### 2-1. 対象

平成30年9月8日～9日に行われたN大学女子バスケットボール部の合計5試合を対象とした。対象とした試合は、10月に行われる北信越学生バスケットボール選手権大会（インカレ予選）の前哨戦であり1か月後に行われる本大会の力試しの試合になると思われる。そこで、ミスプレイの分析により今後の改善点が明確に示すことができるため、研究の対象とした。

### 2-2. 分析方法

分析方法は、5試合におけるミスプレイをデジタルビデオカメラで撮影し視覚的に抽出した。撮影は、体育館2階ギャラリーから行い試合をしているコート一面を見わたせる場所から撮影した。

### 2-3. ミスプレイの分類

ミスプレイの分類については長野・和田野<sup>8)</sup>の分類を参考にし、技術上のミスプレイをパスミス、ドリブルミス、キャッチミス、ボールキープミスとし、ルール上のミスプレイを、ドリブルバイオレーション、トラベリング、ラインクロス、キックボール、3秒ルール、5秒ルール、8秒ルール、14秒ルール、24秒ルールとした。

また、本研究における「ミスプレイ」の言葉の定義として、バスケットボールのルールの観点から、コートが比較的狭く、ゴールが高い位置に設

定されてあるこのスポーツの特性上、ボールを保持するチームにはシュートを打てるチャンスが基本的に保障されているにもかかわらず、吉井の「シュートすることなしにボールの所有を失い、1回の攻撃回数を無為に終了する原因となるもの」<sup>6)</sup>という定義を引用し、本研究ではミスプレイを、「1回の攻撃において、シュートをすることなしに相手に攻撃権を与えたプレイ」と定義づけることとする。

### 3. 結果と考察

#### 3-1. ミスプレイの分類と考察

本研究においては、ミスプレイを技術的なミスとルール上でのミスと分類し考察する。

試合におけるミスプレイの内容は表1の通りとなった。

ミスプレイは、77回発生し、うち技術的なミスが66回、ルールのミスが11回となった。全体傾向として、パスミスは58.8%を示した。ついでドリブルミス20.0%、トラベリング10.0%、キャッチミス3.8%、3秒オーバータイム2.5%、24秒オーバータイム1.3%という数値を示した。これより、ルール上のミスよりも技術的なミスが上回っており、状況判断不足や基礎技術不足ということがわかる。

また、吉井は「技術上のミスプレイにおけるパスミスの割合が84.1%」との指摘を約60年前に示していた。吉井が対象としたのは大学男子であるが、上述した82.6%という割合は、吉井によって示された約60年前の傾向が、大学生女子においても同様に認められたことを意味しており、解決すべく努力が積み重ねられているにもかかわらず、結果的にはほとんど変化していないという事実を示している。さらに、技術上のミスプレイ全66回中パスミスとキャッチミスを合わせた、パスが原因となるミスプレイは50回発生しており、約64.9%という高い数値を示した。長野・和田野<sup>8)</sup>らは、「技術上のミスプレイのパスとキャッチに関して改善すべき点が多々ある」と報告している。研究の対象は大学女子であったが、今回も同様のことがいえると考えられる。パスは「ドリブルよりもはるかにはやくボー

ルを進めることができ、より相手を欺いてバスケット下へとボールを進めることができる」<sup>9)</sup>ため、試合での使用頻度も高く、「パスというプレイを意識し、徹底して練習を行わなければならない」<sup>8)</sup>と考えられる。

また、ドリブルミスが比較的高い約24.2%という数値を示した。このことから、バスケットボールでは、一般のバスケットボール競技の研究の中であまり取り上げられていないドリブルにおけるミスプレイが、大学生女子でも比較的多く確認された。ドリブルが原因となるミスは、バスケットボールでは、主なミスプレイのひとつとして特に注意して練習に望まなければならないと考えられる。

技術的なミスでは、パスミスが103本見られ、全体の36.5%を占めている。ついでドリブルミスが103本であり、19.5%となっている。パスミス、ドリブルミスで大半の56.0%となる。また、キャッチミス、ボールキープミスの技術上でのミスは全体のミスプレイの62.4%を占めている現状となった。技術上でのミスのうち、パスミスは全体の58.5%、ドリブルミスは、31.3%と高い数値となっている。また、ルール上でのミスプレイでは全体で106回発生しており、そのうちトラベリングが56回、全体の19.9%を占めている。

表1 N大学女子バスケットボール部のミスプレイの分類 (5試合)

	回数
パスミス	47
ドリブルミス	16
キャッチミス	3
ボールキープミス	0
<b>技術的なミス</b>	<b>66</b>
トラベリング	8
ラインクロス	0
24秒オーバータイム	1
ドリブルバイオレーション	0
3秒オーバータイム	2
バックパス	0
5秒オーバータイム	0
8秒オーバータイム	0
キックボール	0
14秒オーバータイム	0
<b>ルール上のミス</b>	<b>11</b>
<b>合計</b>	<b>77</b>

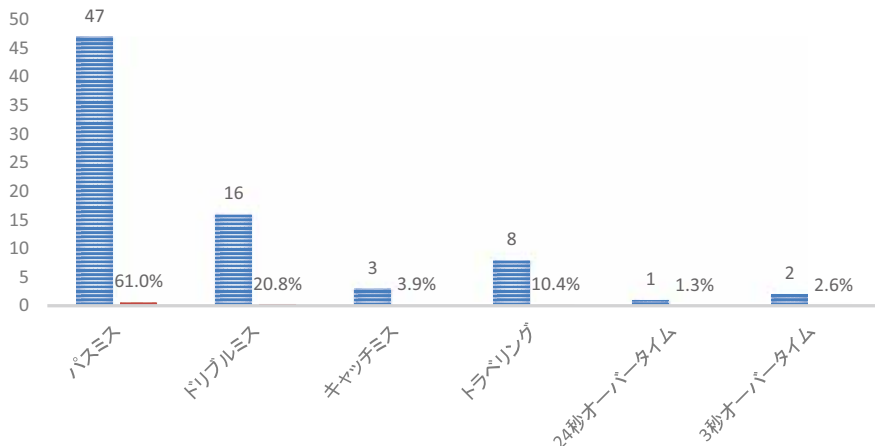


図1 ミスプレイの内実

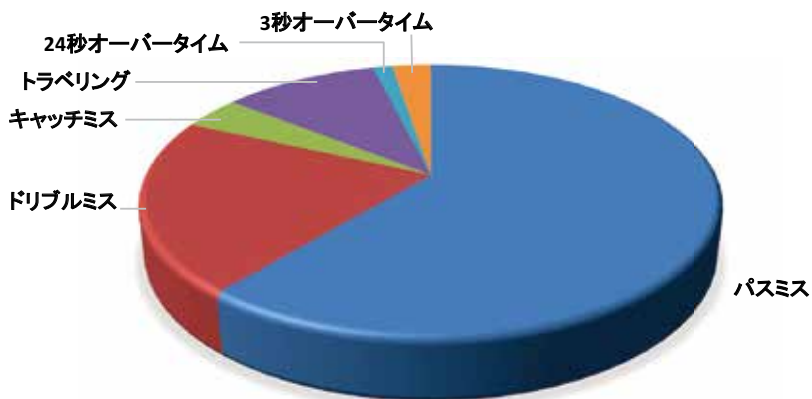


図2 ミスプレイの分類

### 3-2. 試合における攻撃回数とミスプレイに関する考察

全5試合の攻撃回数を調べ、攻撃回数に対しミスプレイの割合について考察した。吉井<sup>6)</sup>を参考に「相手チームのシュート成功数+相手チームフリースローの最後の成功本数+自チームのディフェンスリバウンド数+自チームのオフェンスリバウンド数+自チームに対する攻撃中のファール数



+相手チームのミスプレイ数」を使用し攻撃回数を算出した。

その結果、N大学の攻撃回数は418回となった。攻撃回数418回に対するミスプレイは全回数77回であり、18.4%であった。これは、10回攻撃をしたときに約2回はミスプレイとなっているということである。また技術的なミスプレイは、15.8%であり、特にパスミスは技術的なミスプレイのうち60%がパスに関するミスであることがわかった。このパスによるミスの減少は大きな課題と考えられる。また技術的なミスのうち、パスとキャッチに関するミスが全体の76%を占めていることから、ミスプレイが起こるパスを分析し修正を図ることが必要であると考えられる。

### 3-3. パスミスの分析と考察

ミスプレイの内実より特にパスによるミスプレイが多いということが窺えた。そこでパスに着目しどのような状況下でパスミスが発生しているかを考察を行った。その結果、表2のような6種類のパスミスの発生状況が確認された。

その結果、不適切なスペーシングでのパスミス、意思疎通の相違によるパスミス、ローポスト（インサイド）へのパスミス、アウトナンバーのパスミス、合わせの動きによるパスミス、ボールマンディフェンスのプレッシャーによるパスミスの6種類に分類した。

表2 パスミスが発生した状況分析

発生した状況	本数	%
不適切なスペーシングでのパスミス	12	25.5
意思疎通の相違によるパスミス	11	23.4
ローポスト（インサイド）へのパスミス	7	14.9
アウトナンバーのパスミス	6	12.8
合わせの動きによるパスミス	6	12.8
ボールマンディフェンスのプレッシャーによるパスミス	5	10.6
合 計	47	

「パスは、ドリブルよりはるかにはやくボールを進めることができ、より相手を欺いてバスケット下へとボールを進めることができる」<sup>9)</sup> ため、練習においてもドリブルよりパスを多用するよう指示をすることが多くあるように思われる。つまり「パスというプレイを徹底して練習を行わなければならない」<sup>9)</sup> とされ、試合中もパスの使用頻度は高く、そのためパスのミスも多くなることは予測されることとなる。

パスは、パスを出すパッサーとパスを受けるレシーバー、パッサーやレシーバーを妨害するディフェンダー、ヘルプするその他のディフェンダーなど様々な意図をもった選手による関係があり多様な選択肢のある中で、決断しパスを行う。そういった中、本研究で対象としたパスミスは図3のように分類できた。

パスミスの中で最も多く見られたのが、不適切なスペーシングでのパスミスが12回あり、25.5%であった。適切なパスの距離においては、ボールマンと非ボール保持者との距離関係が重要であり、スペーシングと言われている。スペーシングとは、「攻撃を行う上でプレイヤー同士の間隔のことで、適切なスペーシングは5m前後であるとされている」<sup>10)</sup> と示されている。つまり、選手同士の距離が適切でないことがパスミスの原因となることが多い。例えば選手同士が離れている状況でパスをして、ボールの方向がずれパスをキャッチできない状況やパスが弱くゆるいパスになりパスミスになったり、距離が近すぎてディフェンスにパスをスティールされる状況が最も多く発生した。また、パスを出した時にはレシーバーはパスを

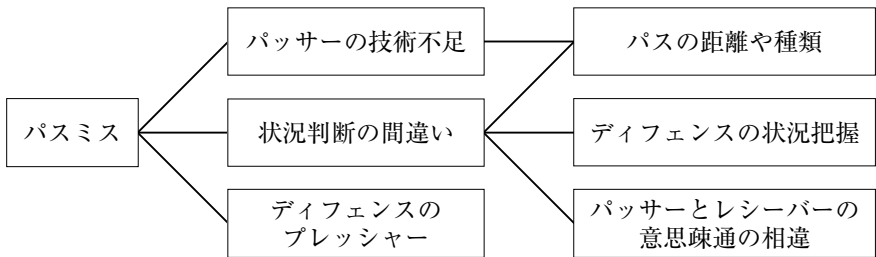


図3 パスミスの分類

受けられる状況であったが、パスをキャッチする際にはディフェンスがパスをインターセプトする場面があった。これは、パスが通ると感じていたが、ディフェンスがパスラーの意図を感知しインターセプトを狙っていることを気づかなかったからと思われる。特にパスの距離が長くなればボール到達時間も遅くなるためディフェンスにパスを狙われやすくなるため要注意となる。

次に多かったパスミスは、ボールマンと非ボール保持者による意思疎通の相違によるミスで11回発生した。これは、パスラーはディフェンスにプレッシャーをかけられておらずパスができる状況であるが、パスラーとレシーバーのプレイの意図が違いパスミスとなるケースである。パスラーは、オンボールマンのディフェンスとオフボールマンの位置（スペーシング）、オフボールマンのディフェンス、パスをするスペース、そのパスのインターセプトを狙っているディフェンスの有無を判断しパスができる、できないの判断をする必要がある。また、レシーバーは自分を守っているディフェンスの位置や目線、スペースがどこにあるかを判断しレシーブできる場所を探すことになる。そして、パスラーとレシーバーの意思疎通が図られたときパスは成功し、相違が見られた場合にはパスミスとなる。

これは、ボールマン、オフボールマンのどちらかまたは両者の状況判断ミスにより発生しているものであり改善することは容易ではないと考えられる。

この意思疎通の相違によるパスミスについては、お互いの状況判断の認識の違いによりパスミスとなっていると考えられ、パスミスが起こった状況をパスラー、レシーバーともに認識する必要があると思われる。そこで、予測力や状況判断を向上させるには認知的トレーニングを行うことで、パスミスが起きた状況や自分自身や相手がおかれた状況が理解でき、どのように対処すればよかったのかをお互いにコミュニケーションをとることで、類似した状況が発生した場合でも意思統一したことでパスミスが減少すると思われる。

例えば、パスラーはパスができると判断したがレシーバーはパスがもらえないと判断し、そこから移動してしまいパスミスになってしまったり、

パスナーはパスがエントリーのパスができないと判断し、レシーバーがゴール方向にカッティングすると思いパスをしたが、レシーバーはエントリーパスが受けられると思いそのまま外側に動き、パスミスになるケースが見られた。これは、パスナーとレシーバーのお互いの状況判断ミスによる結果である。これは、動感を把握する能力が欠如しているかまたは劣っているものであり、お互いの意図を感じ取ることでパスミスは減ると思われる。

次にローポストにパスを入れる時にミスになっている状況が見られた。ローポストにボールを持たせる効果として、「ローポスト付近にボールを持たせるねらいは、何よりもシュートすることにある」<sup>11)</sup>とされている。ゴールに近いところでボールを持つことでゴールに向かうことができ、ディフェンスからファウルももらうこともでき効果的な攻撃ができる。また、「次にパスを中継しながら近くにいる味方とコンビネーションプレーをすることである」<sup>10)</sup>という効果もあり、ローポストにボールを入れるということはオフェンスにとっては重要であることがわかる。ポストマンに必要なスキルとして、シールがある。シールとは「制限区域内やその近くで、ゴールを背にしてボールを受けようとする場合は、ディフェンスと体を密着させながら、自分の体を「カベ」のようにして相手にパスコースに入られないような構えをする」<sup>3)</sup>とされている。このシールは、ゴールとディフェンスを背にして行う高度な技術であり、パスナーはこのシールが完了するまでパスのタイミングを見計らう必要があるが、シールが完了する前にパスをしてしまい、ディフェンスにスティールされたり、パスの方向が違うパスミスが見られた。これは、ポストマンのシールの技術とボールマンのパスするタイミングを合わせる反復練習が必要となる。また、ボールマンのボールキープ力やピボットなどのファンダメンタルの見直しが必要と思われる。

アウトナンバーのラストパス（ツメ）については、ファストブレイクなど得点に結びつける最終的な段階でボール保持者がパスを選択した際に発生しているミスである。アウトナンバーはオフェンスが数的優位な状態であり、ディフェンスにボールを奪取されないことでシュートまで結びつけ

ることができる。ここでは、ボールマンから非ボール保持者に、どの種類のパスでボールを渡すのかパスを選択する判断が重要であり、チェストパス、バウンズパス、ロブパス等のパスの種類の中から最適なものを選択する必要となる。この状況においては、チェストパスやワンハンドプッシュパスを選択し、ディフェンスにスティールさせている状況が多く見られ、バウンズパスを選択していれば得点に結びつくことができるのではないかとと思われる。

5つ目として合わせの動きからのパスミスが見られた。合わせとは、「ボールマンがドライブする動きに合わせて、オフボールマンがパスをレシーブしやすいポジションに移動すること」<sup>12)</sup>とされている。ボールマンがマークマンをドリブルで抜き、アウトナンバーの状態になったときに、オフボールマンがどこに動けばよいかということが重要になる。ここでは、ボールマンがオフボールマンに良いタイミングや場所にパスができなかったミスやオフボールマンがボールマンの見えるところに移動できなかったことで発生したパスミスが見られた。ボールマンのミスについては、ドリブルをとめてからパスを行うことによりボールキャッチがうまくできず良いタイミングや場所にパスができなかったことがあった。ボールハンドリングやドリブルからパスといったファンダメンタルの習得がパスミスを減少させるために必要であると再確認できた。また、オフボールマンの移動については、ボールを注視していることで動き出すタイミングがワンテンポ遅れてボールをキャッチできなかったりディフェンスにスティールされる状況が見られた。これは、オフボールマンがボールばかり見ることなくボールとマークマンの両方を視野の中に入れておくことで、ボールマンのドライブのタイミングに合わせて移動することができると考えられる。

6つ目のパスミスは、ディフェンスにプレッシャーをかけられた状況から起きたパスミスである。これは、ボールマンのディフェンスに強く守られパスをする状況であったが、オフボールマンもマークマンを振り切りノーマークになり切れず、パスをしてしまいスティールされるケースであった。これは、ボールマンはマークマンにドリブルを取られることなくボールをキープしながらオフボールマンはマークマンを振り切ってパスを

受けることができる状況を作り出すことが最優先となる。しかし、マークマンを振り切れず、ボールを受けたいところでボールがもらえなかった場合は、その場で止まらずにゴール方向に向かってカッティングすることが原則となっている。また、パスを受けようとしたオフボールマンが単独でノーマークを作り出すことができなければ、ボールに直接関係していないオフボールマンとスクリーンを使い協力してボールを受けられる状況をつくり出すことが必要となる。このためには、オフボールマン同士が協力できるスペーシングにいることが必要である。スペーシングは、ボールマンの状況によるがオフボールマンにも必要なスキルである。

#### 4. まとめ

本研究では、大学生女子バスケットボール競技に着目し、ミスプレイの内実と現状分析より技術の改善と向上に役立たせるための基礎的データを得ることを目的とした。

ミスプレイについては、大学生女子バスケットボール競技のカテゴリーにおいても数多く出現した。特に技術的なミスプレイにおいては、パスに関するミスプレイが大半を占めた。

パスミスについては、多くの改善点があることが示唆された。

そこでパスミスについて、どのようなパスミスが発生しているかを調査したところ6種類に分類することができた。分類としては、不適切なスペーシングでのパスミス、意思疎通の相違によるパスミス、ローポスト（インサイド）へのパスミス、アウトナンバーのパスミス、合わせの動きによるパスミス、ボールマンディフェンスのプレッシャーによるパスミスの6つであり、これは状況下においてプレイヤーによる高度な判断が必要となる。どのタイミングでどの場所にだれにどの種類のパスをするかを、常に判断し行う必要がある。また、ミスが発生した場合には、どのような状況でミスになったのか状況把握を行い、修正をする必要がある。このミスプレイやターンオーバーは勝敗との関連性が大きく、今後とも継続して調査をしていく必要がある。

今回は大学生女子バスケットボールを対象に、ミスプレイについて分析および考察を行ったが、対象者が変われば結果は変化すると思われる。また、このミスプレイやターンオーバーは勝敗との関連性が大きいいため、今後とも継続して調査をしていく必要がある。

## 引用参考文献

- 1) 日本バスケットボール協会. バスケットボール指導教本, 大修館書店. 2002; 2-17
- 2) 杉原豊, 船越正康, 工藤考幾, 中込四朗. スポーツ心理学の世界, 福村出版. 2004; 52-66
- 3) 金子明友, 朝岡正雄, 運動学講義, 大修館書店. 1990; 123-135
- 4) 石川俊紀, 川井浩, 小森正己. バスケットボールのゲーム分析 (第1報) 1 オフェンスにおける M・P の出現要因について, 日本体育学会大会号. 1981; 32: 591
- 5) 山本剛史, 山中博史, 穂積豊, 佐々木潔. バスケットボールのゲームにおけるターンオーバーについて, 日本体育学会大会号. 1993; 44B: 625
- 6) 吉井四郎. スポーツ作戦講座1 バスケットボール, 不昧堂出版. 1969; 56-59
- 7) 守能信次. スポーツとルールの社会学, 名古屋大学出版会. 1984; 114
- 8) 大学女子バスケットボールにおけるミスプレイ現状分析に関する報告, 茨木県立医療大学紀要第12巻. 2007; 115-121
- 9) 中川文一. モーション・オフenseで戦う, バスケットボールマガジンクリニック 3月号ベースボールマガジン社. 2006; 12-15
- 10) 吉井四郎. バスケットボールのコーチング 基礎・技術編, 大修館書店. 1977; 178-196
- 11) 日本バスケットボール協会. バスケットボール指導教本, 大修館書店. 2002; 111
- 12) 小野秀二・小谷究. バスケットボール用語辞典, 廣済堂出版. 2017; 121